

## 菊舎尼と別府

佐藤 勉

写真に掲げた古文書は、日出町本町の竹内淳氏が所蔵する。長門の俳人「菊舎尼」から、日出の俳人鈴城鷺洲にあてた一文である。

『温泉山の旅寝 いかにと この  
ほとは わざと訪らひ玉ひ 猶 ハた  
いふは美酒 茶 肴 とかく  
珍しきをおくり玉ふ 日出の里  
なる 二水庵主人 同門通志  
のわりなき性情 いかでか  
謝すへき言の葉も たた々々  
感じよろこひて

菊舎

染尽す 誠や

秋の山々に

亦一樽に興して

紅葉焚きて

旅もうき世も

わすれけり

なと御恐評被下候 燈下に

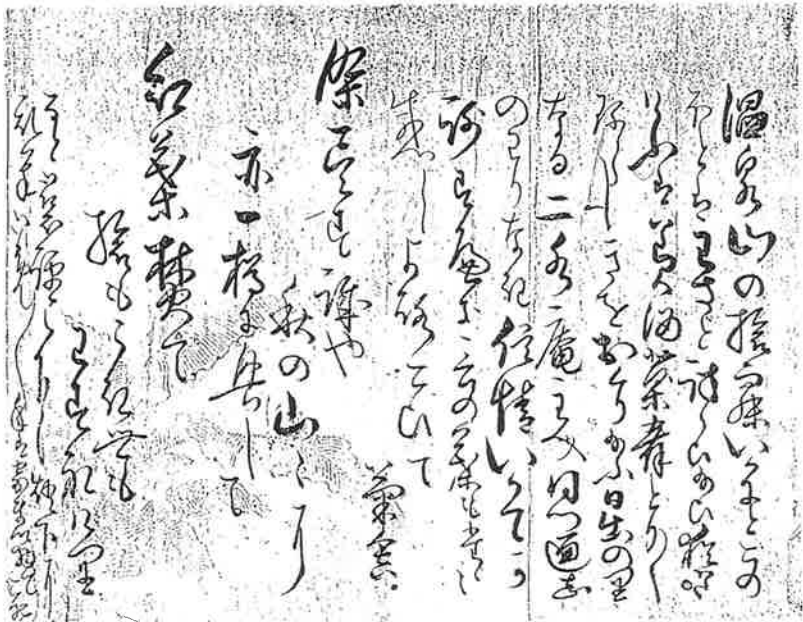
乱筆御免 年わ奇まい物で

『ご座候』

と読める。

菊舎尼は、姓は田上、名は道（ミチ）。長府藩士田上由永の長女。村上家へ嫁ぎ、二十四歳で寡婦となり、その後、美濃以哉派道統六背世の是什坊（朝暮園）傘狂に入門した。其の後、九州には四度巡遊する。第一回九州行脚は天明六〜七年（一七八六〜七）で、百茶坊戀古との旅、第二回は安政八年（一七九六）、第三回は享和三

年（一八〇三）、第四回は翌年の文化元年であった。菊舎尼の著者『手折菊』によると、彼女が別府市南立



石の温泉山観海寺に宿泊したのは、第三回目の享和三年十月のことであった。

『或年、豊後の国の別府といへる所にいたり、所の温泉に入りぬ。又その人々に誘はれ観海山に登り待りぬ。此山に別に一つの温泉あり。湧出る湯口わづか一二尺にも足らぬ内より、甚清温の泉躍り出づ。所の人汲取り、飯食を炊くも是を用ゆ。其風味甚妙なり。予も一椀を甘<sup>ま</sup>したしむ。折から十月朔日なれば、岩のはざまに物打敷て、湧出る温泉を其儘自然の茶釜となして、口切の茶客をまふく、其雅興殊に浅からず。空吹風、たなびく雲の椀中に移り、香風碧雲の色濃くそひ、所謂流霞を吸ふに似たり。即、其風情を画題して詩作あれども、それはわすれぬ。』

とある。この時、日出の俳人鷺洲との交際が生まれたと考えられる。

鷺洲は日出町裏町の住で、日出藩御用商人竹屋五世、通称弥兵衛、諱は重明、俳号二水庵又は櫛秀楼。文政四

年（二八二二）九月一日歿、法名は賢宗浮哲居士という人物である。日出藩の豪商であった鷺洲は、松本義一氏によると、其の後、菊舎尼を自家の櫓秀楼に招いた、と記されているが、松本氏の当該論文は未見であるので、今後の課題としたい。

菊舎尼は観海寺で野外の茶会を催したらしく、

天目に 小春の雲の 動きかな （手折菊）

という。秀句を残している。

註1 松本義一「菊舎尼と二豊」

（『二豊の文化』第八卷第四号に所載）

参考文献

川上つゆ『女流俳人』明治書院 昭和三十二年

「近世俳句俳文集」

（『日本古典文学全集12』小学館 昭和五十八年）